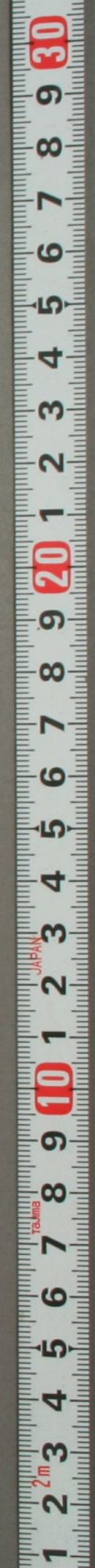


中村俊定文庫  
文庫 18  
397  
2





瓢中吟

四時混雜

東都

柳肘

志々魚や水は目鼻のつく時分  
 秋凡の二多ありき一苗代田  
 よる庭やまきく火庫の下もみち  
 淋しさのじろあ、ゆる葉山子み  
 葉の香や米と塵紙揚るゆの孔  
 山よりも海へそ名へる五ひ寸  
 美人も笑ひぬ辭やその月

柳肘  
 蓼太  
 斑象  
 寒蓼  
 蟻林  
 物雲  
 鯉半





掃やして寺子れ枝の髓の如風  
空川と形るやうちりりあ月 湖風  
帯れきいふ枝吹く月雪光  
在る忘や懐を敷乃を分お 周東  
数宝珠の赤以梅もよ夕涼 白牛  
名月やこよひをあも夏と海 心祇

他郷

甚くおくるりやるれや風の文 南空  
り喜や叶の廿日と孫達とも 身申

去たうう人といふれきやうじ 也右  
かき候くも然せき柳のぬ 呑溟  
物うそく水喜をいふ世帯 琴糸  
野も山も多しはくもみ菜つ 習祿  
名月や心り川へ春をき 東連  
梅うもや連本こころちく幸子み 志水  
心あくくも秋長時よわの 小神 渡柳  
もれ化の春を清く 柳糸 眠江  
さうつあや夕日辰まや初松魚 山奴

新阿のの船んて初玉 唯我  
 無とつふゆりま何のあか海 哥来  
 菖早る船の肩や毒の古義場 上総 亀鏡  
 秋の月や都も菜花 駿府 金鳧  
 初きあかりとや萩のふ 琴馬  
 石の月とひとり明き極う船 居遠  
 比おと川口よ茶よりきやうじ 馬老  
 志る魚の吹水し水のなりか 兀子  
 棧乃う出うぬや 請所 月 麻斤

夏村や管ふてせぶ牛乳と川 燕波  
 極くくのく田を種もの布管一ぬ サ 扇賀  
 山は川煮く 炭取 鳥田 茶来  
 友村やあかきあかき 栗捕  
 風も根の習うとんてま 乃み 楳舟  
 入おの鐘をつうても秋 能く 女 雪菜  
 石壁れあかきあかき 瀬戸 雪随  
 是も又 大宮 耳平  
 此うらの星 は 楳のふ 雁砂

若牛のく袖くぬもよし 男山 城脛 昔我  
 下荷くく知五附くれて銀子花 奥津 蓼雨  
 志ろ結てを花かつてハ小まふ外 百糸  
 阿き風くも度身んて梅の香 雪支  
 うら飛すのいつやと啼く菽梅 曙山  
 乃せり身ある月のせりや藤刈子 中里 波光  
 鈴々成人の目もくく夜人 湖青  
 酒中舞又控ひれしてを抽糸 宗高 折山  
 ちのさきとむのま物の牡み 中里 少言

うらひす乃破へりす初吾我 三糸  
 夕まやよき水く踏紙はひり 久能 踏割  
 志かませてやがる花何り杜み 素笠  
 浮きやうきく何をくく花も足 葵戸  
 寺いと何枝の星や蝶のくえ 茶話切  
 車舟くりやも此等可り相乃茶 雪川  
 夕ま紙中よりく度す柳糸 堂目 水壺  
 中くく人古並ねく 草花 養尔 調柳  
 志ろねくや時何枝の度り 唯揚

清き月や照るに河もも川田も  
 何従  
 夕なかりあまの影もるを  
 何可  
 空も影もるを水も深て指授  
 可後  
 火とゆて照ハ狐乃を地系  
 采五  
 秋も川や風も煙も出る花乃  
 柳色  
 芥子の葉もあまを  
 元子  
 初〜くは〜ん〜ん〜ん  
 五作  
 芥子  
 京  
 山只

歌仙

於采菴真行

海棠やと〜〜〜てあ〜もま〜と〜ん  
 蓼太  
 光〜せ小社乃禱も〜と〜も  
 元子  
 う〜らむくひ〜ら男は去〜ん  
 固竹  
 風夜の聲はさ〜ぬ〜ら〜る  
 蓼且  
 江如月の影もあ〜くと掛り  
 蟻治  
 撥桶乃や〜の〜の  
 大耳

京府とく限居夫婦と申入  
 ちとかりとあれ百とてふし  
 伐もつ山とちまぬ松一本  
 さむいさきと秋松のつれく  
 糸す又返して去て見る破とこ  
 糸とむきとこ紙乃碎  
 登りてく可らぬ麻のちまて  
 日とあらしれ陰乃行れ  
 仕下等とけりれの根より入り

葛才  
 萬吉  
 免夕  
 太  
 子  
 竹  
 耳  
 夕  
 古

ちと限のちと城とてあふ  
 傀儡のちと危れりしてむの陰  
 まふれとちり乃ちとちとちり  
 送膳りともちてけのちと  
 治市乃ちとちり刀あけり  
 中垣のちと神ひくちとちり  
 谷七卿乃ちとちりちとちり  
 ちとちとちとちとちとちと  
 何、敷汁乃ちとちとちと

才  
 旦  
 洛  
 太  
 耳  
 竹  
 子  
 夕  
 古





系此者。門子多行。氷控うふ 夫仙  
 河青や沼ぬぬ。氣のあそこ。 自来  
 霧なう。影を。景に。流ひ。ひ。 眠我  
 新風。腰乃。飛り。や。解ふ。く。 夢把  
 切。多。成。是。弱。つ。里。と。お。ひ。り。 馬雲  
 多。柳。や。も。ろ。あ。く。ゆ。て。女。多。字。 之。壘  
 蔭。み。ふ。れ。の。相。日。と。起。る。首。外。 前雨  
 門。と。ゆ。く。ま。く。香。れ。中。や。梅。の。花。 溪里  
 る。や。成。啼。節。一。り。き。あ。う。く。 有止

推の。あ。り。り。全。縣。も。さ。せ。ん。お。 帰蒼  
 野。々。を。の。一。字。跡。う。て。却。お。 花明  
 せ。ま。ま。と。様。の。あ。な。い。は。の。を。 九水  
 旅。さん。と。そ。の。力。り。揚。ひ。る。り。 沾我  
 胡。く。の。家。う。く。さ。き。納。を。賣。 藁左  
 歩。ひ。と。川。せ。り。り。と。取。る。風。う。ふ。 具雪  
 兼。好。う。留。ま。き。ひ。り。り。と。川。經。 八窓  
 心。留。や。宿。を。志。く。れ。の。て。窓。敷。 北魚  
 夕。ま。り。り。引。る。り。た。ら。ぬ。ま。あ。ふ。 市柳

吹く風よしの秋風やあき賣女 祇傘  
 うぐすの行及つる初冬介 蓼駒  
 まさききしと平屋標の為衣 若水  
 は糸陽もや立茶よを乃胡弓若 桂山  
 五糸あよハキとたぬやう流り多 柳依  
 ありうきまや切や中分の麻乃角 彭春  
 うぐすのてく糸ハ忘れ小柴垣 魚汝  
 を又輝拂ひ深くふく魚介 芦一  
 ひとらほく秋の明けや白うさね 乍曙

人おきしぬやのも燕丸 求光  
 一富士のから新はやを月茄子 葵太  
 白くくもの通きし五日置 人左  
 名月や垣も糸丸を白う海已 嵐亭

他卿

起くよ遠めつしや銀子のあ越中 麻父  
 岸下も深うてもる五多女也 李夫  
 標海す夕日や移れ下り京 花次  
 さしとや海ありしと乳川 歩月

歩むうひ大板より庭にう紫水戸之六  
八し女乃よりううりて流葉出羽 壱  
能者もれ葉をつるうと草上山 投茶  
幸あま又限者のうりて葉の石 節庵  
能因の蛙と啼ん新のう水伊訪 如之  
ふまうとと人の形尺や隠縁像 二目坊  
山くの葉乃塊れなとさす 何者  
細くの包かやさうと牡子上徳 砂川  
名月やも地乃限も帰る牛 山紫

夕之葉海へ送ゆる山乃端 御風  
麦府や存すか丁埋め葉相取 麦由  
葉にゆき尺やさや子ふらる 曲阿  
香多や夕く水あねれ梅の照遠取 巴来  
喰のこ子まれば流路や帰る厂 登竹  
黄て又指りまうとそ横う肌掛川 竹裏  
さみく水やひとくそく海を花駿府 鳳枝  
志く葉や深路くくの中よ咲 竹工  
露有くく葉もわたり一木銀 葉府

ありくと 熊の ちきありの 日くさかき 葛才  
 藤白を 土若 ちきありの 口くさかき 蟻治  
 こそ 熊の ちきありの 三石 ちきありの 凡子  
 二部 して 政の ちきありの 沖 ちきありの 由井  
 ひくさの 虹や ちきありの ちきありの 柳市  
 志く 梅や ちきありの ちきありの ちきありの 水  
 由井川や ちきありの ちきありの ちきありの 水  
 つめくさの ちきありの ちきありの ちきありの 解哥  
 釈く ちきありの ちきありの ちきありの 竹奴

名月や ちきありの ちきありの ちきありの 兀子  
 積く ちきありの ちきありの ちきありの 残馬  
 ちきありの ちきありの ちきありの ちきありの 濯浮  
 ちきありの ちきありの ちきありの ちきありの 千布  
 夕まや ちきありの ちきありの ちきありの 茶筵  
 ちきありの ちきありの ちきありの ちきありの 素郎  
 川一 ちきありの ちきありの ちきありの 白鶴  
 ちきありの ちきありの ちきありの ちきありの 偽水  
 ちきありの ちきありの ちきありの ちきありの 梅富

文一 下

⑤

刈新の産るやうちう新乃蝶後陣田し兒  
 蝶々や蚕の綿もよみ々入り尾城紀来  
 鬼灯や女隠居のもれたむし 八亀  
 子も一海女始ま向一梅の香 木兒

歌仙

於圓山寺真行

固休

旁よりや籠の産もきのふきぬ  
 八羽とこれあけり初月 元子

玉ゆれ魚屋の茶碗裏へ纏いて 蓼太  
 傘と家まるとす川海をく 萬古  
 鴉あつてくして城下の人まらぬ 子  
 刈あつてきく女は乃明きく 休  
 眠くもまゝ維摩をれ候きく 古  
 醫者もろく女侍のちりてけり 太  
 もの産く物産乃西次もこの回 休  
 あまも出りそのまの猿の夕暮 子  
 境くらの海邊て幸ふ村まき 太

さしてとあつと笑ふよ遊埃  
ゆゝゆゝ橋二条河原に船を  
着るゝそりて蝶のや川さ  
極男のひとりを舞を舞さ  
者ゝゆゝ、舞ふは立乃百華  
さるゝ月世もあつゝあつゝ  
中ゝも啼て草もひゝゝ  
ゆゝ風月又字紙の私気は  
ゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝ

古 子 竹 古 太 子 古 太 子 古 太

ゆゝ糸の小使若くは口つとて  
細と伊達さくおのむゝ  
拵ものゝ半の欠ゝは螺貝  
一刀流紙汝志ゝゆゝ  
麦飯の左よあやうゝ登ゝ  
ゆゝゆゝ滝乃影も海  
ゆゝゆゝ乃巻山乃せて戻り  
されとも下戸の拵も  
後の日蚊を恨もるゝ危

子 太 竹 子 古 竹 太 古 子

ちとるしりしけて引板の節はあ  
 ひやうい桶の帯はさうやあ  
 居くやらうと奈乃やうあ  
 采札の晴てるし日のもさ  
 今はく経を八系乃外  
 相よとてあせてまの終き  
 ちとるしりしけて引板の節はあ  
 ひやうい桶の帯はさうやあ  
 居くやらうと奈乃やうあ  
 采札の晴てるし日のもさ  
 今はく経を八系乃外  
 相よとてあせてまの終き  
 ちとるしりしけて引板の節はあ  
 ひやうい桶の帯はさうやあ  
 居くやらうと奈乃やうあ  
 采札の晴てるし日のもさ  
 今はく経を八系乃外  
 相よとてあせてまの終き

名三下

四

瓢中吟

四時混雜

名月やあふ交ふてあ柳東都婆心  
 後まぬまゝくもはし銀子持 周竹  
 equal して吹起しある小家う家 雷堂  
 流るの先言つらる虫やうれ 吐月  
 秋風やま橋乃をりむり 信夫  
 角落て秋より漸く鹿の意 如雷  
 柳樹北津も見て月のぬ 南畝  
 又玉のふもああ一相虫桶 宜中



名月や樂屋のいづぬ執事より  
あゝゝゝるや湯多き外一破の松  
泣くゝも暮少む麻や錦くき  
あゝゝゝりある葉のむれけ  
々もそ枝はくよまきや蝶は  
七夕やあゝゝゝ枝ぬ橋は  
湯汁は流るゝいふふき  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

傘車  
紅星  
白鳳  
風堂  
底花  
春ひ  
祇竹  
賀鏡  
如扇

あゝゝゝ魚や水と湯して陽田川  
十日ゝゝるれも物乃れん北  
横をれ及も付り山さくら  
帳はゝゝらゝ多あ成存や村れ  
月丸ゝゝいりゝ梅の咲れ  
何進中て被ぬ中ふゝきり  
根を中ね人や影屋の破る  
終るゝりやまれゝゝゝゝ山

青布  
石磧  
野菊  
枚頁  
萬古  
蓼太  
伯兔  
鳥醉

他卿

花よりとるるれば古き柳の風 出菊  
 貝も帆張おろして待つは夕き河に 吾竹  
 いそしき田畑の味う那 長門 花上  
 梅の香や遠水くちもさう 紀州 梅峨  
 遠ありく世を志月を 武蔵赤松 葉林  
 ありあけの例さげや能く 帰景  
 うら花すの二足踏て初 山史  
 赤さぬく終れ晴きや 五出  
 麦刈くはむさくおや 嵩之

縮つるのさそめてひや お山女 仙衣  
 岩心てと月移る房 上総 雪団  
 古望む人々 京地 羽人  
 五梅や障子より 平田 六渡  
 こゝみ松の節あり 呂風  
 荻根の初を 春字  
 ちくく鹿の尾を 法目 眉山  
 餅を人 不更律 芦風  
 ちくく柳 多根 蚊牙

下

(五)

ちとれ大の屋々内はく白丁を 甲辰 踏雪  
 船舳より川や襟の波のり 十嶋 渭水  
 さみしきやいつまて 後府 耳得  
 暁の星もゆきゆき 網代守 盈行  
 夕ぐれに女乃 欲れきぬ 小野 夢珠  
 秋のりや十筋 後府 のみ 子來 丸更  
 一柄 移る 子來 清水 後府 子來  
 墨染 孫道 此 孫道 あり 孫道 あり 孫道 あり  
 山あふれ 紙 雅堂 あり 雅堂 あり 雅堂 あり

茶の肴や日苗入 味乃付て来 六貫  
 笠脱て 黒 女 山 越 尺 後定 くりん  
 屏 蕪 倚文 あり 倚文 後 倚文 あり 倚文 あり 倚文 あり  
 羊 蹄 兔夕 あり 兔夕 あり 兔夕 あり 兔夕 あり  
 鬼 灯 兀子 の 兀子 あり 兀子 あり 兀子 あり 兀子 あり  
 掬 珥水 あり 珥水 あり 珥水 あり 珥水 あり  
 揚 北花 の 北花 あり 北花 あり 北花 あり 北花 あり  
 吸 大賦 あり 大賦 あり 大賦 あり 大賦 あり  
 甚 千潮 あり 千潮 あり 千潮 あり 千潮 あり

目んくそくは富士とあうそくな非也 塘此  
 紫陽もや人乃くあハ定くは 花蔭  
 空影やゆふ夜と咲おく純 五秋  
 人きくく鶴のまほやまの秋 兀子  
 月の也や鶴白の星此又ひひり 遠及 碧三  
 森あやうく有り電ふりゆく根う 清田 くに  
 富士川や草紙けあて啼あき 大耳  
 ありあうゆ水もありかむつとく 後府 鍾山  
 血あうゆ遠うて北也此物きん 相良 后好

於くもあき此暮の予草也 蓼太  
 陸くく鶴鶴久くくや少相冠 京 藤文  
 川きくく雲あゝ定乃流くも 可固  
 菽入や雁の落る古き夜もの 浮風  
 くりやあや櫻あゝる乃を空てけ 栗津 可風  
 漆汁のやあゝる夜く可る也 女素  
 たまきせあゝる誦るり 加賀尼 素園  
 あうきて朝日り成る樹く風 用更  
 借々 権雲此扇やんくき原 既白

文二下

(十九)

老慵 歌仙

兀子

さめてうら喜れ中々暖浦外  
 うつと火ひとひ暖の花 菓太  
 山く城郭のふらち居て  
 十玉の笠は十色しりり  
 吸う名もなきは仙やあらは  
 田中乃細戸糸に何れも 大五子

う

忽ちと々や日の月れ杉うけ又  
 旅さぬ一雁とやまけいそく  
 つと髪より指の麻をまきけり  
 又の舞乃舞うけ居る  
 豆色に揺りて秋を焚かこり  
 代りき馬乃縄をさし申く  
 さしえう根糸は脚の黒うは  
 伸さうつきの腕よりそ秋  
 探幽乃帰帆と續く秋のる  
 子 太 子 太 子 太 子 太 子

及下

下

春持れ去るぬ旅の夕々色  
行ぬくよ海苔橋乃風名あり  
まゝて菱色垣隣ち梨  
修あ板と戸形ぬ障れ今以  
梵編とがろとの笛てるに  
足ひきのわく草鞋メ直し  
鮎裂 甲れきやうくしや子  
みり秋の錦木なりよめえり  
よみ旅ち踏す 昔の下みち

太子太子太子太子太子

稀ち速方神代乃花ひと月  
降侍く日の糸とあやう  
若もたえと申すの楊後ひ金  
人の寸白紙お目も若う  
月ちりり洩てハ指ぬ少紋の糸  
箬の棧のと出乃くかれ  
葉内れひらくは苗持まけく  
世がなうくの巻く互板  
せ磬より我所の強もまゆらん

太子太子太子太子太子太子

蘇州下

廿

門子所へある汝のさぬく  
夕へく乃其の雲  
系ゆふ杖乃休と藜と  
太  
左  
執筆

書林

京寺町二条上丁  
井筒屋在兵場  
江戸浅草市堂前  
辻村五兵衛  
同日本橋二丁目  
戸倉屋在兵場

